

ライン工房
情報誌

第38号

街の風

企画・制作
社会福祉法人 ライン工房
〒861-8041
熊本市東区戸島5丁目8番6号
TEL 096-380-5752
FAX 096-380-1343
E-mail rine2001@alpha.ocn.ne.jp
URL <http://www17.ocn.ne.jp/~line/>

年頭のご挨拶

学ぶこと、活かすこと



社会福祉法人ライン工房 統括施設長 熊川 嘉一郎

先日、2人の支援員が休みの日を使って外部機関主催の研修に参加してきました。

その研修では日常の仕事のヒントとなる話を聴くことができ、とても勉強になったという感想が伝えられました。アマチュアではなくプロとして仕事をする上では当然にプロとして恥ずかしくない技量が求められますし、その技量を身につけるための学びは欠かせないものです。支援員としてどのように学んでいくのか、自分の支援技術をどう高めていくのかという上で、日常の支援を実践する中から気づきを得て、それを基に考えていくということももちろん大切です。そしてまた、このような外部の研修機会というのも日常とは違う角度からの刺激を与えてもらうことができ、貴重な学びの機会ともなります。

ただ、どんなに良い話を聴いたとしても、それを聴いただけでは「良かった、勉強になった」というある種の満足感が得られるだけで、残念ながら大して身にはつかないものようです。

例えば、自転車に乗れるようになろうと思ったときに、いくら乗り方の講義を受けて理屈上ではしっかり理解できたとしても、それだけで乗れるようにはならないものです。やはり実際に乗ってみたいことには身体がその感覚を覚えてはくれません。また、「畳の上の水練」と言われるように、手足の動かし方や呼吸の仕方を実際に水の中に入ることなくいくら練習したところで、いざ水に入れば溺れてしまうかもしれません。

研修もこれと同じですね、という話をスタッフにはしたところです。

理屈として学んだこと、あるいはロールプレイ(演習)を受けたその内容について、それだけでは実際の仕事の中で生きてくるものではないでしょう。学んだことを頭に置きつつ実際に日常の場面で試し行うこと、そしてそれを繰り返しながら徐々に自分の血肉にしていくことがなければいくら学んでもただ「良い話が聴けて良かった」で終わってしまうの

だろうと思います。そういう意味では研修機会の「その後」こそが大事になるのでしょう。

当たり前ですが、私たちの仕事は支援の質が問われます。そしてその質の良否というものは「結果」となって現れます。では何が結果なのかというと、例えば就労継続支援 B 型事業であれば利用される方の力を最大限引き出し得ているのかということだったり、そこに「あなたがいなくては困る(いてくれて嬉しい、助かる)」という彼らの確かな役割があるという環境を作り得ているのかということだったりするでしょう。あるいは就労移行支援事業であればそれぞれの利用者が望む就職の形を実現しそれを満足して継続できる状態を作り得ているのかということになります。相談支援事業においては提示された問題をきちんと解決し安心と満足を提供できたかということが問われます。

そしてそれらは詰まるところ、私たちが支援する彼が、彼女が今この時、この社会に存在している、その存在の質とでも言うべきものを如何にして高めているのかということに通じるものだと捉えています。

その支援の質を上げるためには日常の内外で大いに学び、学んだことを現実場面で工夫しながら実践し、そこから得たものをスタッフ自身の力にして積み上げていくことが何より必要なのでしょう。もうこれで十分というゴールのない積み上げですが、利用される方から、そのご家族から、そして関係される皆さまから、確かに質が上がりましたねと言ってもらえるよう今年も一年、全スタッフで取り組んでまいりたいと思っています。

ところで、外部研修を受けた2人を含めて若いスタッフたちは「畳の上の水練」という言葉を聞いたことがないということが判明し、ややよろめきつつも私自身も確実に古い世代に属する年齢になっているのだと改めて実感させられてしまいました。若い者に混じらせていただきながらまだまだ私も学び続けていきたいと思っております。